ない一輪車

赤羽日菜

生まれた時から一度も
あったことなんてない
一輪車
に
今日からぼくは
乗らなければならない

かたむいた三日月
その日　生まれたての足たちが
ふかく車輪にむかって
絡まり
もったいぶったように
融合
きみが
ぼぅ、と喉をならした
言葉を
取り逃がす蝉になって　とたん

まわりだす十字架

あいにく
日々を乗れるようになっても
空　が晴れることはない
転んだふりをして

地球のかたち

ぼくですら気づかない
うねり曲がる木々の間に
まだ……
いくらか　いびつ　に　なる

ことを
神のいない星では
信者たちが
赦している

目を伏せてばかりで
きみはまだちっとも
生まれてなんかいない
ないペダルがまた跳ねて　ぼく　を　宙に
転がす
なんどもなんども
ぽ
意味のない轍を描く
からの轍
ぽ　ぽ　ぽっ

何も知らない
ことを
知っている、
ことは
不自由だから

不自由

家の裏の緑を見てトトロがいそうというわたしに
そこはゴルフ場なんだ　と　　いう

潔さ
　は
絡まった足
透けたくつ　いつしか
　ぼく

すべて知っているふりから
なにも知らないふりまで　乗りこなす

不自由

そういえば、

氷床にしずむ
人に残された
残り少ない轍
そのさなかに　ふと
いつか今日の日を思い出す日のことを思い出す

そうだ

止まることを教わらなかったから

もう

二度と降りれない

十九、五七三回目の三月

ずっとないことだけがあった